

# 文学と疫病——郭沫若初期の小説を中心に

藤田梨那

## 序

人類は、長い歴史の中で何度も疫病に見舞われ、これらと戦ってきた。中世ヨーロッパで猛威を振るった「黒死病（ペスト）」は、アジア、中東をも巻き込んで、7500万以上の死者を出した。この外、コレラ、天然痘、腸チフス、梅毒、ハンセン病、風疹、「スペイン風邪」、マラリア、結核、エイズなど、実にさまざまな疫病が人類に脅威を与えてきた。今日、新たに発生した新型コロナウイルス「COVID - 19」は、世界各地でパンデミックを引き起こしている。疫病を克服するために、人類は知恵を絞り、科学、特に医学の力を大いに活用してきた。そのため、医学は大きく前進し、また前進しつつある。一方、この戦いは文学にも刺激を与え、文学作品に新たな題材や視野を付与したのも事実である。これまで、多くの作家は文学作品に疫病を扱った。ヨーロッパでは、ボッカチオ、カミュ、シェリー、キーツ、ヴィクトル・ユゴー、オー・ヘンリ、トーマス・マン、トルストイ、バルザック、アンリ・ミュルジェールなど。日本では、徳富蘆花、泉鏡花、伊藤左千夫、永井荷風、堀辰雄などが挙げられよう。

本論文では、中国の文学者郭沫若を取り上げ、彼の文学と疫病の関係を見ていく。

郭沫若は、1920年代に詩人として文壇に登場した。当時彼はまだ医学生で日本に留学中であった。1914年に、郭沫若は日本に渡り、東京第一高等学校、岡山第六高等学校、九州帝国大学医学部と留学生活を送り、1923年に医学士の学位を取得する。その間、医学を学ぶ傍らで文学創作を始め、処女詩集『女神』を上梓した。また、中国近代文学史に重要な役割を果たした文学結社創造社を立ち上げた。つまり、彼には医学と文学が常に並行して自分の生活にあった。郭沫若の初期作品とは、日本留学前後の時期に執筆された作品を指す。

一方、20世紀の日本には、さまざまな疫病が蔓延していた。そのなかでも結核、コレラ、梅毒は代表的な病気であった。医学生である郭沫若は、当時日本で流行っていたこれらの疫病に身近に接し、その経験は、また彼の文学創作を刺激した。疫病はたびたび彼の詩歌、小説に登場する。詩歌では、「天狗」「解剖室にて」「メザンスロップの夜歌」などがあり、小説では、「残春」「キャラメル娘」「落葉」「曼陀羅華」などがある。

彼の作品に登場する病気は結核、腎臓炎、不眠症、神経衰弱、瘰癧（頸腺結核）、脚気、コレラ、梅毒、赤痢、蓄膿症、腸カタル、チフスと多岐にわたる。本論文では、

留学前後の時期の小説を取り上げ、郭沫若における文学と疫病の問題を覗いていきたい。作品としては主に「残春」「キャラメル娘」「落葉」に絞っておく。これらの作品に共通するのは、結核と恋愛とを描いていることである。言うまでもなく、結核は疫病の一つとして、明治期から昭和中期にかけて日本で最も猛威を振っていた。この三つの作品は、恋愛——結核——告白という共通点をもつ。結核は彼の創作にどのような役割を担っていたか。また、この時期に彼が心酔していた西洋の詩人、小説家は、彼の作品に如何なる影響を及ぼしたか。これらはいへん興味深い問題である。

## 一、郭沫若と結核

結核は、16世紀から1940年代検査薬、治療薬のペニシリンとストレプトマイシンが出現するまで、実に数世紀にわたり地球上で最も広範囲に蔓延した伝染病の一つであった。日本では、明治時代に結核が大流行し、「国民病」とも、「亡国病」とも呼ばれた。

郭沫若が日本留学した1914年（大正3年）から1923年（大正12年）はちょうど結核が猖獗をきわめていた時期である。この頃東京で出版された留学指南書に『留学生鑑』<sup>i</sup>がある。その第十四章は、「肺病及び脚気の予防」とあって、肺病の予防、徴候、治療の注意、転地療養と具体的な項目に分けて、結核について述べている。実際、中国から来た留学生の中からも感染者が出た。郭沫若が最初に体験した結核病は、同郷の留学生陳龍驥の罹患である。1916年（大正5年）、陳龍驥は結核で東京の聖路加病院に入院した。病状は既に末期である。郭沫若は見舞に訪れ、当時結核治療の権威であった北里病院への転院を勧め、自ら友人に付き添って、北里病院へ移った。しかし、転院の甲斐もなく、友人は亡くなってしまった。友人の死に郭沫若は深い悲しみを受けると同時に、人生の新たな啓示を得た。彼はこの体験を、1920年出版の書簡集『三葉集』所収田漢宛ての書簡に詳しく記している。

彼（陳龍驥）は車の中に横たわり、車輪が振動する度に絶えず乾いた咳をした。咳込むたびに、大理石のように青白い顔に桃色の赤い血潮が湧いてくる。涙を含んだ両眼は炯炯として無限の希望を湛えて私をじっと見つめている。あの可哀そうな姿を、私は一生忘れられない。彼のあの限りない希望はどこへ行ってしまっただろう。<sup>ii</sup>

これは、1920年2月15日、郭沫若が田漢に書き送った書簡である。恐らくこれが結核に触れた最初の文章であろう。目の当たりにした友人の苦しみと命のはかなさに彼は、大きな衝撃を受けたことが伺える。

陳龍驥の死は、当時郭沫若の周囲に結核が遍在していたことを示している。一方、郭沫若は1919年（大正8年）に九州帝国大学医学部に入学し、医学を学んだ。彼は「亡国病」と呼ばれた結核について、近代医学の知識を知り得る環境にいた。そのため、彼は数年前に伯父夫婦と兄嫁が、みな吐血して死亡した出来事を想起して、彼らの死因も結核であることに気づく。日本留学中に故郷の姪子も肺を患って死亡した。彼は父母に手紙を出し、結核で死亡した親族の部屋の消毒を勧め、消毒薬と消毒方法まで詳細に指示した。<sup>iii</sup>

## 二、結核と恋愛

ヨーロッパでは、17世紀以来、結核や梅毒、黒死病（ペスト）は、たびたび小説や詩歌に登場してきた。日本でも明治から昭和にかけて徳富蘆花、泉鏡花、永井荷風、伊藤左千夫、堀辰雄ら実に多くの文学者は作品において結核を扱った。これらの作品のほとんどが結核病故の悲恋、孤独、美しく病み衰えていく命を描くのを眼目としている。このようなロマン派の作品は、また中国人留学生に大きな影響を及ぼした。郭沫若より一年早く来日した郁達夫は、日本留学中に小説「銀灰色の死」「沈淪」「空虚」「茫茫たる夜」を発表する。これらの作品はすべて結核病患者を主人公にしている。郭沫若も1922年から1925年にかけて小説「残春」、「キャラメル娘」、「落葉」を発表している。

結核とロマン派文学の結びつきは、すでにアメリカの文学批評家スーザン・ソントグ（Susan Sontag）や同じくアメリカの病理学者ルネ・デュボス（Rene Dubos）によって注目されている。結核の神話と文学の関係について、ソントグは結核のメタファー効果に注目し、「結核の隠喩はまず愛を描くのに利用された——“病める”愛とか、“焼き尽くす”情熱といったイメージがそれである。（略）それがロマン主義以降になると、このイメージは逆転して、結核の方が恋の病いのひとつの形と考えられるようにいたる。」<sup>iv</sup>と指摘する。ソントグは、文学における結核の役割の一つとして“愛の隠喩”を重視した。

郭沫若の作品においても、結核はメタファーとして恋愛物語にその効果を発揮している。「残春」（1922年）では、主人公愛牟（アイム）は自殺未遂の同郷の留学生が入院していた病院の看護婦S嬢に恋する物語である。看護婦S嬢に対する愛牟の恋は、心理的には片思いであるが、二人の接触を実現させたのはまさに結核である。看護婦S嬢は肺を患っていた。愛牟は医科大学の学生、未来のドクターである。二人の逢瀬は夢の形で描かれる。

愛牟の夢の中で、彼とS嬢は門司の筆立山で会っていた。S嬢は自分の結核を告白、愛牟に診察を迫る。結核の身体的諸症状は、彼女の魅力を表すだけでなく、愛牟の医学的知識でさえS嬢の可憐さと恋愛感情を誘発させるのに効果をあげている。つまり、夢の中で、結核病は、一つの特別な心理環境を構成し、登場人物

の内なる告白を切実に表出するのに効果的だったのである。

「残春」におけるもう一つ重要なキーワードは薔薇である。愛牟が看護婦S嬢にプレゼントした花である。愛牟は病院を離れた後、病院にいる友人から手紙が届く。手紙の中に散った薔薇の花びらが挟まれていた。

私は薔薇の花びらを愛読しているシェリーの詩集に挟んで、葉書を一枚書いて、門司に送った：

散ってしまった薔薇の花、  
一枚、二枚、三枚、  
別れて二日、三日、  
君は何故このように憔悴したのか？  
ああ、花のようなあの子は、  
このように憔悴しないことを願う。<sup>v</sup>

「残春」の結末は、薔薇の花びら、シェリーの詩集、愛牟の詩で結んでいる。薔薇は恋する女性や愛の情熱をイメージする表現として文学作品に多く使われている。“散る薔薇”、“病める薔薇”は常に恋の悲劇を暗示する。シェリーの詩にも薔薇が重要なキーワードである。「——へ」という詩に、

ばらの花びらは、ばらが死ぬ時  
散り重なって、愛する人の褥になります——  
だから、あなたへの想いに、あなたが去ってしまっても、  
愛はまどろみ続けます……<sup>vi</sup>

とある。シェリーには、早すぎた死を詠んだ詩が多い。愛した女性の死、愛した友人の死。詩の中で、薔薇は愛を具象化する表現である。郭沫若が「残春」にシェリーを登場させる用意はどこにあるのか。周知のように、シェリーは結核患者であった。その親友キーツも結核を患っていた。キーツは結局26歳で命を落とした。シェリーは友人の死を悼んで、哀歌「アドナイス」を作った。これはイギリス詩歌史上で最も美しい哀歌と言われている。シェリーもキーツも郭沫若が日本留学中から傾倒していた詩人である。1926年に彼は、翻訳『シェリー詩選』を出版している。「残春」の結末で、シェリー詩集と薔薇の花びらに、結核——恋愛を暗喩し、命の終焉、悲恋の美しさを表現する作者の意図が込められていると言えよう。

「キャラメル娘」は1924年8月頃に執筆され、1925年上海「東方雑誌」に発

表された作品である。前年彼はすでに九州帝国大学を卒業して、一時期家族を伴って上海に帰国していたが、1924年4月に執筆のために再度日本に渡り、福岡に住んでいた。「キャラメル娘」はこの時期に書かれている。

「キャラメル娘」は、主人公「私」がある友人に宛てた手紙の形式を取っている。「私」は日本に留学していて、福岡のとある工科大学の学生である。既に家庭をもっていた。手紙の中で、「私」は町のあるキャラメル店の看板娘に恋し、片思いに苦しむ内面を告白している。恋する「私」には二つの障碍があった。一つは、「私」が妻帯者であること。もう一つは、中国人であること。「私」が常に激しい情欲と自分が持つ障碍の露見に対する恐怖に悩まされる。

作品の中で、「私」とキャラメル娘の距離を縮めたのは結核である。ある時、キャラメル娘は瘰癧を患った。瘰癧は医学名スクロフラと言う。結核菌による頸部リンパ腺膿瘍の一種である。作品中で、キャラメル娘は手術を受けて、頸部に包帯をしている姿が描かれている。「彼女は病んだ。頸部に包帯が巻かれ、左の頬にPikrin（消炎膏薬）の黄色が付いて、皮膚が浮腫んでいる。」この痛々しい様子を見て、「私」は同情と憤慨の気持ちがこみ上げてくる。

瘰癧だと！これは肺結核と関係するものではないか！牡丹がようやく蕾を出したのにもう虫に食われた。あの子は平民窟に住んでいなければ、どうして肺癆にかかることがあるのか。ああ、残酷な社会！鉄の鎖で平民をがんじがらめに縛り付けて、猛烈な病毒の蹂躪に晒す。(略)私は医者を羨ましく思う。もし私が医者だったら、あの子の病気を見てあげられる。彼女の名前、家族、病歴も聞ける。手で彼女の目、頬、首を触って……。<sup>vii</sup>

「私」の同情の中に、結核の流行を助長した社会の不平等に対する憤慨があった。「私」はまた医者に憧れる。医者であれば、思い悩む恋の障碍は存在しなくなる。「私」は神経衰弱症に格好つけて、同じ病院に通った。一か月後、キャラメル娘の瘰癧は治ったが、「私」は本当に神経衰弱症になった。ここでも、作者は結核を使って、恋愛を描く特別な場を形成させて、主人公の情熱を高揚させると同時に、神経衰弱症という近代人の精神的病いを引き出す。作品に描かれる「私」の恋はほとんど妄想であったが、しかし、恋の妄想は最終的に「私」の精神を侵し、自殺へと追い込んだ。恋の片思いから妄想へ、更に自殺へとエスカレートしていくなかで、結核と神経衰弱症は大きな役割を果たした。

「落葉」は、「キャラメル娘」の後に書かれ、1925年秋に「東方雑誌」に連載された。作品は書簡の形式を取っている。日本の医科大学に在学する中国人留学生洪師武と、看護婦で日本女性菊子の悲恋物語である。この作品に、梅毒、結核、虎疫（コ

レラ) 神経衰弱を扱っているが、そのうち特に結核と梅毒はこの悲恋物語と直接に関係している。冒頭に、洪の友人「私」が洪から聞いた悲恋の顛末と菊子の書簡を託される経緯を語る。洪は、留学の前に親が決めた結婚をしている。彼はこの婚姻に失望し、日本に逃避する。自暴自棄になって、女遊びをしたため性病にかかり、梅毒と診断される。実はこれは誤診であった。しかし、そうと知らない彼は絶望に陥る。その中で、結核を患った友人を懸命に介護して、人生の意味を見出そうとした。病院で彼は看護師菊子と知り合い、互いに愛し合うようになる。後に医科大学に入学する。洪は、自分が既婚であることと梅毒患者であることで悩み、最終的に菊子の愛を拒絶する。菊子は失意のうちに南洋へと旅立つ。その後、洪は医学の知識から自分の病気が梅毒ではなく、軟性下疳であることを知る。彼は菊子との愛を取り戻すため、退学して南洋に行く。しかし、菊子を見つけ出す前に彼は結核を発症してすでに第三期であることを知る。死を目前にして、洪は上海に帰り入院した。そして死ぬ前に菊子からもらった手紙を友人の「私」に託す。

菊子の手紙は全部で41通、ある年の9月7日から12月25日クリスマスまでのものである。手紙には洪に対する菊子の愛が切々と綴られている。手紙から、洪は岡山の医科大に学び、菊子は東京の病院の看護婦であること、菊子は仙台出身で、クリスチャンであること、父親は仙台の牧師であること、彼女は恋のために家族を捨てたこと、が書かれている。明らかに、郭沫若と佐藤富子との恋愛体験を踏まえている。(第四で詳述) 実際、郭沫若と佐藤富子は家族と関係を絶って愛を成就させたが、洪と菊子の恋は最終的には実らなかった。その原因は梅毒と結核である。

菊子の第一通の手紙は、「ゆく水に身を任せたる落ち葉かな」という俳句から始まる。「落葉」という題名はこの句に因んでいる。

文学において、落葉は人生と関連して、失意や終焉を表現する。ホメロスの叙事詩以来、死者の魂を風に舞う落葉に喩える。落葉のこのイメージが長い間西洋の詩歌の中で使われてきた。18世紀に入って、落葉あるいは枯れ葉はまたしばしば結核菌に侵された肺を暗示するようになる。菊子の手紙の冒頭のこの俳句には、恋の結末及び結核に侵された命の終焉を暗示する作者の意図が読み取れる。落葉の他に、菊子の結核を暗示する表現として、薔薇の花、赤い葡萄酒の池がある。第29信において、菊子は薔薇の花を自室に飾って、「私はこの薔薇のように散ってしまうのではないか。」と嘆く。また、「どうしたことか、最近体は弱くなって、毎日の激務に耐えられない。(略) 夢の中で大理石の池(浴槽)に入っていると、お湯は赤い葡萄酒に変わり、血のような生臭さが漂ってくる。」<sup>11)</sup>とある。

赤い葡萄酒は、結核の民間療法で、興奮剤や強壯剤として用いられていた。また結核と関連した文学作品(徳富蘆花「不如帰」、田山花袋「田舎教師」など)

にしばしば登場する。赤い葡萄酒の赤色は、血を連想させる。菊子の夢は、彼女の体が結核の脅威にさらされていることを暗示している。

菊子は最後の手紙において、洪との恋愛を諦め、南洋に赴任するとある。その後、菊子のことは誰も知らない。「落葉」に描かれている悲恋は、梅毒の誤診から始まり、南洋へ逃避、洪の結核死へと辿る。当時日本で流行った病気、梅毒と結核は、文学において、悲恋を描く特殊な環境として利用されたのである。

### 三、告白の形式

前述したように、「残春」「キャラメル娘」「落葉」は、結核——恋愛——告白という共通の性格を持っている。三つの作品はみな第一人称「私」の語りによってストーリーが展開している。特に「キャラメル娘」「落葉」は書簡の形式を取っている。「キャラメル娘」は主人公「私」が友人に宛てた一通の手紙に、キャラメルを売るある娘に対する愛情を告白する。手紙のなかで、「私」が初めてキャラメル娘を見た時から、愛の妄想が膨らみ、最終的にキャラメル娘を追って東京へ行き、持っているピストルで自殺を決心するまでの過程を語り、自分の激しい恋情と絶望を告白している。妻とキャラメル娘の間に揺らぐ心、強い性的衝動、神経衰弱の苦しみを巡り、深い心理描写が見られる。

「落葉」に至っては、書簡による構造は一層重厚になる。冒頭に「私」の叙述によって、洪と菊子の恋の顛末、洪の死をあらかじめ読者に公表する。この前提の上で、菊子の手紙を日付順に並べる。この形式は、中国の近代文学の中では魯迅の「狂人日記」(1918年)に酷似する。日記体に対して、書簡体を使って、画期的な作品となる。手紙において、菊子の生活や仕事、以前洪と遊んだ房総の思い出、父との確執、洪から生活費の援助をもらったこと、自分の体調の変化など、日常の出来事から家族との決裂まで、綿密に記されている。特に信仰心から、親に黙って中国人留学生を愛してしまったことに対する自責、苦悩を赤裸々に綴っている。

自伝や書簡が自己の内面分析や告白を表出する絶好な手段として近代文学に登場したのは十八世紀頃である。その代表として、ルソーとゲーテを挙げることができよう。郭沫若は、日本留学中にルソーの『懺悔録』とゲーテの『ファウスト』『若きウェルテルの悩み』を愛読した。1922年に、彼は『若きウェルテルの悩み』を中国語訳し、上海で出版した。周知のように、この作品は、心理の告白に最もふさわしい書簡形式の心理小説である。第1巻、第2巻は、ウェルテルが友人のウィルヘルム宛の書簡と「編者より読者へ」の三部で構成されている。青年ウェルテルはロッテに対する愛の感情、不安、絶望、幻滅、世界苦を手紙の中で赤裸々に語っている。

郭沫若が初めて書簡形式の創作を実践したのは『三葉集』である。これは、郭沫若と友人の宗白華、田漢の三人の書簡集である。三人とも20代の青年で、郭

沫若は九州帝国大学、宗白華は上海「時事新報」文芸欄の編集長、田漢は東京高等師範学校に在籍していた。三人は上海、東京、福岡から文通し、恋愛、詩歌、演劇、自由精神について議論を繰り広げた。その中で、ルソーとゲーテはたびたび登場する。特にゲーテは、三人の共通の関心対象であった。郭沫若は、ゲーテ研究会の設立を提案する。「私の考えは、ゲーテの傑作を一つ一つ中国語に翻訳し、徹底的に紹介する。」<sup>ix</sup>と本格的にゲーテを中国に紹介する計画を立てた。この頃、郭沫若はすでにゲーテ『ファウスト』の翻訳に着手していた。『若きウェルテルの悩み』についても、田漢宛の書簡に、「翻訳したい気持ちは十分にある」と表明している。実際、その後、進行中の『ファウスト』翻訳を一時中断して、『若きウェルテルの悩み』の翻訳に取り掛かり、『ファウスト』より先に、1922年に中国語訳『少年維特之煩惱』の出版を実現させた。『少年維特之煩惱』は中国におけるゲーテ紹介の最初である。出版後、中国の青年たちに熱烈に歓迎され、「ウェルテル熱」を引き起こした。その後、重版、再版が多く行われた<sup>x</sup>。

『三葉集』の出版はゲーテの『若きウェルテルの悩み』に刺激を受けた作品である。三人の青年が、自分たちの書簡を、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』と形式的、本質的にも「同等に論じられるもの」<sup>xi</sup>と考えたから実現できたのである。1920年5月、『三葉集』は上海泰東書局より出版される。中国文壇において、初めて現れた新しいスタイルの作品である。

一方、『若きウェルテルの悩み』の翻訳を通して、郭沫若は、内面世界への目覚めを一層深めた。「少年維特之煩惱・序」に彼は自分のゲーテ観を披露している。彼はゲーテを偉大な主観詩人と、この作品を素朴な詩と捉えた。ゲーテの精神について彼は、1、主情主義、2、汎神思想、3、自然への讃美、4、原始生活への憧憬、5、小児への崇拜を挙げる。特に、1の「主情主義」において、ゲーテの考えるところの心情は智と才能より上位であることを強調する。「この心情こそは私の誇る唯一のものであり、力も、浄福も、悲惨も、すべてはこの泉から湧く。」と、ウェルテルのことばを引用し、そこから恋愛至上主義を肯定する。また第2の「汎神思想」については、「汎神は即ち無神、一切の自然はただ神の表現である。自我もただ神の表現である。我は即ち神、一切の自然はただ自我の表現である。(略)全精神をもって愛す。己の自殺を完成する。これは至高な道德である。」<sup>xii</sup>とゲーテの汎神思想とその生き方とを結びつけ、その反伝統的な生き方と考え方に共鳴する。

序文において、郭沫若はまた、『若きウェルテルの悩み』誕生の契機、すなわち、ゲーテの友人エルーザレムのピストル自殺に言及することを忘れなかった。この自殺が、ゲーテに衝撃を与えたのは言うまでもない。当時のドイツ社会にも、青年郭沫若にも大きなインパクトを与えた。『若きウェルテルの悩み』は、ヨーロッパで共鳴、讃美、批判を巻き起こした。“生の苦悶”、“恋愛不自由”から人々が競っ



てピストル自殺をする、所謂“ウエルテル熱”が起こった。このことについても郭沫若は序文で紹介し、「文藝は既成道徳や既成社会に対する革命の宣言」である故、「大いに人々に歓迎された。一方、また世を憂う道徳家たちの反対を受ける」<sup>33</sup>と分析する。

ウエルテルのピストル自殺は、『若きウエルテルの悩み』「編者より読者へ」の部分で、恋人ロッテへの手紙を交えながら描かれている。一方、「キャラメル娘」の結末では、主人公「私」は恋い焦がれる恋人キャラメル娘が、ある東京の商人と結婚し、東京へ連れて行かれたのを知って、絶望する。友人に宛てた手紙に次のように記す。

私の内面に抱えている火山は、我が体全体を振蕩させている。私の体は死体だ。列車は私の棺桶だ。私を東京の廢墟へと運んでいき、そこで葬ろうとしている。

私は青酸を一本、ピストル一丁を持っている。東京へ行って人を殺そう。少なくとも自分を殺そう！

これでよし。もう書くのをやめるよ。墓は迫ってくる。<sup>34</sup>

主人公「私」は毒薬とピストルを持って東京に行き、キャラメル娘を探し、最後に自殺を図ろうとする。このような展開は明らかに『若きウエルテルの悩み』の結末を踏まえている。「キャラメル娘」は全体として友人宛ての手紙の形式を採っている。手紙の中で、留学10年来自己の変化を吐露している。希望や未来への期待、現実の中での不遇、失望、叶わない恋、自己嫌悪と、まさに「病める魂」の暴露である。ここに郭沫若の『若きウエルテルの悩み』への共鳴、書簡体創作への意図が読み取れる。

#### 四、「落葉」の告白

前述したように、1916年、郭沫若は、友人陳龍驥の死という悲しい体験をした。実は同時に、彼はもう一つ思いがけない体験を得た。それは佐藤富子との出会いである。当時、佐藤富子は聖路加病院の看護婦で、陳の病棟を担当していた。二人にとって運命的な出会いであった。1920年、彼は友人田漢宛ての書簡にこの恋を告白している。

初めて私が安娜（佐藤富子）を見たとき、彼女の眉間に輝く一種不思議な潔光に私は肅然として敬愛の念が生じた。一週間後、亡き友人の後事を処理し終わった頃に、安娜は我が友人のレントゲン写真を送ってきた。英文の長い手紙も添えてきて、宗教上の諦観的な教訓が書かれていた。（中略）思うに、神様

は私を憐れんで、契己の友人を失った代わりに一人の淑女を賜り、私の空白を埋めてくださったのだ。それ以来、私たちはよく文通し、兄妹と互いに認め合う仲になった。8月から12月まで、彼女は東京で、私は岡山で、千里を隔てて手紙に頼って心を通わせた。毎週平均3、4通の調子で文通していた。<sup>xv</sup>

多少誇張した表現ではあるが、初めて愛すべき人と出会った気持ちが見て取れる。ここで注目するのは、佐藤富子を郭沫若に引き合わせたのは、友人の結核死であり、悲しみと喜びを同時に味わうということである。郭沫若はこの時の気持ちを、「bitterish な sweetness」(苦味を帯びる甘蜜)<sup>xvi</sup>と語る。「落葉」に見られる中国人留学生洪師武と日本人女性菊子の恋愛は、郭沫若と佐藤富子の恋愛が題材になっている。

ちなみに、佐藤富子(1895～1994)は明治28年、仙台郊外の大衡村で、佐藤はつと入り婿である卯右衛門の長女として生まれた。佐藤富子の父親佐藤卯右衛門は日露戦争を体験してついに牧師となった。1887年にアメリカのパプテスト伝道教会から女性宣教師ミス・ファイフが仙台に派遣され、以来プロテスタントの一派パプテスト派が仙台で信者を拡大してきた。1892年、ミッションスクールの尚綱女学院が設立された。佐藤富子と妹の操は共にこのミッションスクールに入った。彼女たちは学校の寮に寄宿していた。この学校で佐藤富子は、アメリカ人宣教師について、キリスト教や英語などを学んだ。

ミッションスクールを卒業する頃、両親は彼女のために縁談をまとめた。しかし、富子は反発し、家を飛び出した。彼女は単身で東京にやってきた。1916年年初頭のことである。その頃教会病院である聖路加病院は看護婦見習いを募集していた。佐藤富子はこれに応募した。そして、その年の夏に、郭沫若と出会う。1916年12月に、二人は岡山で同居を始める。郭沫若は彼女に郭安娜という中国名をつけた。佐藤富子は中国人留学生との恋愛と同居を親と相談なしで決断した。今日と違って、当時の社会では、結婚については、家を重んじる意識が根強く存在していた。結婚は本人同士の気持ちよりも家父長の意志が優先された。佐藤富子は、もともと長女で、婿を取って佐藤家を継ぐべきところ、勝手に中国人留学生と同棲したため、佐藤家から勘当される羽目になった。以来、佐藤富子は、仙台の実家に帰ることはついになかった。

「落葉」では、郭沫若と佐藤富子の恋愛体験を多く取り入れ、登場人物菊子に佐藤富子を投影している。この作品の一つの特徴は、異国男女の恋愛のプロセスよりもむしろ菊子の心理に焦点を当てて描いている。菊子の手紙にたびたび「悲哀」「煩悶」「苦悶」「罪悪」といった表現が見られる。「落葉」のキーワードとも言うべき表現である。では、菊子の苦悩は何であるか。それは以下の側面を含む。

- 1、恋い焦がれる恋情
- 2、信仰への罪悪感
- 3、家、父母を捨てる苦しみ
- 4、生活苦

第1信と第2信に、二人が房総半島那古海岸で数日間過ごしたことが書かれている。菊子は、第2信の中で、

海岸での短い生活は夢のように過ぎた。いま思い出して、私たちはどんなにか恐ろしい罪を犯しただろう。お許してください。快樂の生活はただ恐ろしい罪悪の痕跡を残すのみ。<sup>xvii</sup>

菊子が感じた罪悪とは、既婚男性を愛した所謂倫理上の罪悪感とキリスト教徒として、神の許しを得ていない恋愛という信仰への罪悪感である。菊子は、洪師武への愛と神に対する罪悪感の挟間で苦悩する。そして懺悔によって感得したことを恋人に告白している。

自分が罪深い女だと思うと名状しがたい恐怖に襲われ、思わず跪いて神に祈祷した。その時、『聖書』の有名な一節が頭に浮かんだ。イエスキリストはどんなに慈悲深い、同情深いお方だろう。お兄様、「ヨハネ福音書」第8章第3節から第11節をお読みください。(中略)私たちは、真心からのお願いと涙によって、隠さず懺悔すれば、きっと神の救いと恩沢を得られる。心から神に感謝する。私たちはこれより新生を得た。(中略)私たちは倒れても立ち上がり、立ち上がってまた倒れる。それでも私たちはきっと目指す目的の頂上に辿りつく。<sup>xviii</sup>

菊子が言っている「ヨハネ福音書」の箇所は、人々が不貞を果たした女を投石して殺そうとしたのを見て、イエスは、「あなた方の中に罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と言った。人々は黙って離れた。イエスは女に言った、「行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」という有名な話である。菊子は神に告白することで自分の罪悪感を濯ぎ、生きる自信を回復する。恋と罪の葛藤は、菊子のすべての手紙に見られる。

恋と罪の問題について、郭沫若はゲーテの『若きウェルテルの悩み』を意識し、踏まえていると思われる。例えば、『若きウェルテルの悩み』1771年8月12日の書簡で、ウェルテルは、ロッテの夫アルベルトと罪悪をめぐって議論したことを記している。

「しかしですね。」と私はつづけた、「ここにもまたいくつかの例外がありますよ。」

確かに窃盗は罪悪だ。しかし、自分と家族を目前の餓死から救うために盗みに出かけるとしたら、この男が価するのは刑罰ですか？それとも同情ですか？不貞の妻とその下劣な誘惑者をむりからぬ激怒から殺害した夫にむかって、誰がまず最初の石を投げますか？歓喜のひとつき、おさえがたき恋のよろこびにわれを忘れた乙女にむかって、誰がまず最初の石を投げますか？われらの法律、この冷血なる銜学の化身といえども、それには心うごかされ、刑罰を保留する。<sup>xix</sup>

ここで、窃盗、不貞の罪悪に対して、ウェルテルは異論を唱える。ウェルテルが踏まえていた根拠は、先に見た「ヨハネ福音書」にあるキリストの話であることは言うまでもない。ロッセをひたむきに思いながら、現実とその恋が成就できない。その苦しみにもがくウェルテルは、『聖書』に救いを求める。同時に、現実社会の法律に批判の目を向ける。ここに、ゲーテの主情主義とヒューマニズムを読み取れよう。

近代において、「病気は、自我に対する新しい態度の比喩となった」と同様、「告白」もまた新たな意味をもつようになる。柄谷行人が指摘するように、「告白は決して懺悔ではない。告白は弱弱しい構えのなかで、“主体”たること、つまり支配することを狙っている。」<sup>xx</sup> ウェルテルは、告白と懺悔を通して、むしろますますロッセへの愛を確信し、愛を貫くために自ら命を絶った。「落葉」の菊子もまた懺悔によって、愛を生き抜くことを確信する。ついに愛が実らず、南洋に去っていく時、洪師武に宛てた最後の手紙に、「南洋の孤島に一人の異国の娘が生涯懺悔している。彼女の祈祷の中に、あなたの名前を唱えるのを永遠に忘れないだろう」と書く。菊子も最後まで「主体」を貫いたのである。

菊子は、洪師武との愛のために、故郷の父母を捨てた。41通の菊子の手紙に5通このことに触れ、心中の苦しみを告白している。牧師である父親は東京に来て、菊子に故郷に帰るよう要求したが、菊子はこれを拒否した。それは、洪師武との愛を貫くためであるが、そのことを父に告げられない。彼らの恋愛には最初から多くの障害があった。洪師武は中国人であること、既婚者であること、菊子の親が家を継いでほしいと要求したこと、望まない縁談などである。手紙の中で、父娘の対話が長々と続く。最終的に菊子は父の要求を断る。第8信に菊子は悲しく訴える。

お兄様、私は父を失った、母を失った、国も失った。自分で選んだ運命です。しかし、なんと悲惨な恋愛だろう！なんと悲惨な縁だろう！（中略）しかし、お兄様、私は深く、深くあなたを信じている。信じているからこのような結果になった。可哀そうな娘はあなたの愛を信じて、すべてを捨てた。<sup>xxi</sup>

菊子が故郷、親を捨てるというのは、佐藤富子のことを踏まえている。富子は親が決めた縁談を拒否して、仙台の実家を飛び出して上京する。東京で郭沫若と出会い、恋に落ちる。前述したように、当時、郭沫若はすでに既婚者であった。彼らは、恋愛、同棲のことを互いに故郷の父母に黙っていた。後に発覚し、富子は実家に勘当された。このことは長い間佐藤富子と郭沫若を苦しめた。「落葉」の前に、郭沫若はかつて身辺小説「鼠災」（1920年）、「人力以上」（1925年）、「漂流三部曲」（1924年）の中でこのことに触れている。しかし、これらの作品はすべて男性を主人公とし、男性の口から恋する女性のことを語る構造を取っているため、女性の心理はほとんど描かれていない。「落葉」は、初めて恋する乙女を主人公にして、佐藤富子との恋愛体験をふんだんに取り入れ、菊子を富子に重ね、その恋情と苦悩を切々と語らせた。41通の手紙の中で、菊子の苦悶する内面を赤裸々に開示したのである。

「落葉」は書簡体の心理小説である。この作品には、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』の影響が大であることは言うまでもない。中国語版『若きウェルテルの悩み』に付せられた郭沫若の序文から分かるように、彼がこの作品に最も共鳴したのは、そこに描かれている青年特有の心理とゲーテの主人公主義である。愛と自分の心情こそ崇高なものと主張するウェルテルを、彼は、「愛のない世界は光のない幻燈である。彼（ウェルテル）の心情は幻燈の中の光である。死滅の中でも直ちに情調豊かな宇宙を生み出す。」<sup>xxii</sup>と称賛する。愛の追求、自己主張の願い、既成の社会的現実への反感、相剋、絶望、生の倦怠から自己破壊、このような気持ちは、この時期の郭沫若も重く抱えていた。この気持ちは彼を『若きウェルテルの悩み』に共鳴させ、「落葉」の創作に駆り立てたと言えよう。

## 結語

スーザン・ソントグは、疫病と文学との関係について次のように指摘する。「十八世紀に到って（社会的、地理的な）移動が新たに可能になると、価値とか地位とかは所与のものではなくなり、各人が主張すべきものとなる。それは新しい服装観（ファッション）を通じて、病気への新しい態度を通じて、主張される。服装（身体を外から飾る衣装）と病気（身体の内側を飾るもののひとつ）とは、自我に対する新しい態度の比喩となった。」<sup>xxiii</sup>ソントグは、近代におけるファッション観と病気観の変容に近代人の自我意識の拡張を捉えている。結核の場合は、まさに「病気において、意志が肉体を通して語る」自己表現なのである。

郭沫若の「残春」「キャラメル娘」「落葉」に見られるのも近代人の自我意識の表出である。「残春」の看護婦S嬢は結核の診察にかこつけて大胆に「私」に迫る。結核に特有な青白い顔、大理石のような肉体は、内側からその魅力と情熱を強烈に表現している。「キャラメル娘」の「私」は、キャラメル娘が瘰癧を患ったこ

とから、彼女に対する情熱が一層激しく湧き出る。「落葉」の洪武師は結核で命が尽きようとする最後の瞬間まで、恋人を求め、愛を伝えようとする。

三つの作品の男性主人公は、妻帯者、中国人留学生。女主人公は日本の女性で、彼らのどちらかが結核を患う。恋には多くの障害があるが、彼らは社会道徳に背いても、信仰に反しても、家から勘当を宣告されても、愛を貫こうとする。愛の魅力と情熱は、結核によっていっそう強く表現される。主人公の強い情熱と内面の苦悶は、第一人称の語りや書簡形式によって告白される。恋愛——結核——告白という三つの要素が結合して、悲恋の心理小説を紡ぎだす。この時期、郭沫若自身の恋愛体験や疫病体験が、作品の題材となったわけである。これらの作品において、疫病に翻弄されながらも愛を求める青年の苦しみ、悲しみを赤裸々に描くと同時に、作中人物が自己の内面をさらけ出すことによって、愛の追求、自己の生き方への主張を打ち出している。

恋愛を疫病の一つである結核と関連させて描写する点、書簡形式の点において、この時期、郭沫若が深く傾倒したシェリーやゲーテの影響が強いことは、すでに見てきた通りである。「残春」「キャラメル娘」「落葉」はともに郭沫若の初期の作品であるが、西洋文学に対する受容の一端を色濃く見せている。また近代人の自我意識を強く反映した作品として、中国近代文学史において大きな足跡を残した。

#### <註>

- i 『留学生鑑』 東京啓智書社 1906年
- ii 『三葉集』 p40 『郭沫若全集』第15巻 人民文学出版社1990年 筆者訳 以下同じ。
- iii 『桜花書簡』 p164 1921年12月 父母宛書簡 四川人民出版社 1981年
- iv 『隠喩としての病い』 p29 スーザン・ソントグ著 富山太佳夫訳 みすず書房 1982年
- v 「残春」『郭沫若全集』第9巻 p34 - 35
- vi 『シェリー詩集』 p255 岩波文庫
- vii 「キャラメル娘」『郭沫若全集』第9巻 p227 筆者訳、以下同じ。
- viii 「落葉」『郭沫若全集』第9巻 p137
- ix 『三葉集』 p120 『郭沫若全集』第15巻 人民文学出版社1990年
- x 郭沫若訳『少年維特之煩惱』は、1922年上海泰東図書局から出版後、1930年まで15版重版。1926年、上海創造社出版部より再版、5版重版。この他、上海聯合書店版、重慶群益出版社版、上海新文芸出版社版、北京人民文学出版社版などがある。
- xi 郭沫若から田漢宛書簡 『三葉集』『郭沫若全集』第15巻 p120

- xii 『少年維特之煩惱・序』 『郭沫若全集』 第15巻 p311
- xiii 『少年維特之煩惱・序』 『郭沫若全集』 第15巻 p317
- xiv 「キャラメル娘」 『郭沫若全集』 第9巻 p238
- xv 1920年2月15日田漢宛書簡。『三葉集』 p41 『郭沫若全集』 第15巻
- xvi 1920年2月15日田漢宛書簡。『三葉集』 p40 『郭沫若全集』 第15巻
- xvii 「落葉」 『郭沫若全集』 第9巻 p77
- xviii 同上 p 80
- xix 『若きウェルテルの悩み』 p62 岩波文庫
- xx 柄谷行人 『近代日本文学の起源』 p100 講談社 1983年
- xxi 「落葉」 『郭沫若全集』 第9巻 p93
- xxii 『少年維特之煩惱・序』 『郭沫若全集』 第15巻 p 311
- xxiii 『隠喩としての病い』 p41 スーザン・ソントグ著 みすず書房 1982年